



TITLE:

コメント2

AUTHOR(S):

帯谷, 知可

CITATION:

帯谷, 知可. コメント2. CIRAS discussion paper No.85: 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族3: 装いと規範2 --更新される伝統とその継承 2019, 85: 45-46

ISSUE DATE:

2019-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_85_45

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

コメント 2

帯谷 知可 京都大学

私もそれぞれのご報告を、たいへん楽しませていただきました。ありがとうございました。なかなか全部をまとめるのは難しいですが、いずれも、現代において「これが私たちの伝統だ」と思われているものが、意外に新しいものだということがよくわかるご報告だったのではないかと思います。伝統は変わらないものだと思いますが、かなり刻々と変わっていくし、その変わっていく過程で、さまざまなことが起こっていくものなのだとあらためて感じました。

すべての報告に関わるようなコメントとしては、近代的な、あるいはこれから目指すべき装いと、いまの時代にとって現代的な装いというものが、伝統を脚色するようなかたちで刻々と作り変えられていくプロセスが、たいへん興味深いと思いました。

森先生のご報告では、キモノをハイファッションとしてどう見るかというお話もありましたが、私はウズベキスタンのことを研究していて、ヴェール問題に関心を持っていろいろ情報収集をしてみましたら、伝統的な中央アジアの絹緋などの素材や刺繍のデザインを使ってオスカー・デ・ラ・レンタやグッチ、ヴァレンティノが近年作品を作っていて、「中央アジア・イカット」がかなり流行しているということを知りました。そのようなかたちで、世界各地の民族衣装や民族衣装に使われる素材・技術が今やグローバルな場に出て、ハイファッションに使われるという例がたくさん出てきているようです。そのような方向性も、装いと規範を考えるに当たって私たちは念頭に置いてよいのではないかと感じました。

パルダにおけるイスラーム的要素と南アジア的要素 —— 賀川報告について

個々のご報告に対していくつか質問させていただきます。最初のご報告に対して、賀川さんとは今まで何回かいろいろな場面でお話をしているので、また少し異なる視点から一つお聞きしたいと思います。パルダというのは、私たちからするとイスラーム的な慣習だと思ってしまうのですが、実は南アジア的な

ものでもあるわけですね。イスラーム的なものと南アジア的なものがパキスタンのパルダにおいて、どのようなかたちで結び合わさっているのか、賀川さんご自身は現時点でどう整理されていらっしゃるか、お聞きしたいと思います。

もしかすると、南アジア的な覆いは、中央アジアとも関係があるのではないかと最近ぼんやり考えています。賀川さんが南アジア的な覆いの文化とイスラーム的な覆いの文化のいわば関係性について、どう考えていらっしゃるか教えてください。

伝統衣装の位置づけとイスラーム過激派への懸念 —— 岡田報告について

岡田さんのご報告に対しては、同じ中央アジアなので、おうかがいしたいことがたくさんあります。やはりトルクメニスタンというのは中央アジアでは圧倒的に情報が少ない国で、ご報告を聞いて本当に不思議の国だなという印象も強くしました。

ご報告の中で、トルクメン女性の伝統的な衣装が一番上にかぶるものとしてご紹介いただいたものがありました。私が研究室から持ってきたこの衣装はたまたま同じタイプのトルクメンのものです。袖が背中側で縫い留められていて、実際には袖は通さず頭からすっぽりかぶります(資料4-1)。トルクメニスタンの場合は生地や刺繍がたいへん特徴的ですが、まったく同じ形状のものがウズベキスタンでは明確にイスラーム・ヴェールと位置づけられていました。1920年代には、女性にこのヴェールを放棄させることが、ソヴィエト体制下での女性解放の象徴でした。ウズベク語で「パランジ」と呼ばれるこのヴェールを着けた女性がいらない社会を築くことが近代化の象徴であり、女性はこのを着用しないように、男性は身内の女性にこれを着用させないようにしようという共産党主導の強力なキャンペーンが行われました。トルクメニスタンでは当時どうだったのか、ご存知でしたらお聞きしたいと思います。イスラーム・ヴェールというような位置づけはなかったのでしょうか。



資料4-1 トルクメニスタンのチュルピ
 ほぼ同様の形状の長衣はウズベキスタンではパランジと呼ばれる
 〈帯谷知可所有〉

トルクメン人のような遊牧民の場合にはあまりヴェール着用の実態はなかったという一般的な理解はあるかと思います。ソビエト政権もそういう認識をもっていて、遊牧民については、ヴェール着用よりは、花婿側から花嫁側の家族への莫大な婚資の支払いと女性の隔離が女性解放の象徴になったとされているようですが、そのあたりトルクメニスタンでは具体的にどうだったのでしょうか。

「コイネック」という語彙についても、興味深くお聞きしました。ウズベキスタンでも女性がふだん着るゆるやかなワンピースのことを一般名称として「コイネック」とトルクメニスタンと同じ名称で呼んでいます。これをアレンジして制服にしようという議論はないようです。

また、国家が服装を管理しようとする、対象はやはり女性に向かいがちですね。近年タジキスタンでは、職場ではこのような、家ではこのような、学校ではこのような服装をしろという具合に、場面に応じた女性の服装のガイドブックのようなものが出されたそうです。現物はまだ見たことがありませんが、数百ページぐらいあるものらしいです。またウズベキスタンの大学でも、男女別に「学生はこういう服装で大学に来るように」と服装コードを設定する事

例が見られます。女性に対しては、ヒジャーブは絶対にいけないし、かといって肌の露出が多過ぎても、ボディラインが強調され過ぎてもいけない、という指示が含まれています。

どうもこうしたタジキスタンやウズベキスタンの例では、明らかに「女性にイスラーム的な服装をさせない」、「ヒジャーブ禁止」という意図が服装管理の背後にあって、それはイスラーム過激主義がそこから始まるという固定観念が強いためようです。国境を接するアフガニスタン情勢が流動化したりすれば「タリバーンが力を盛り返してその影響が及んでくるのが怖い」という意識があって、それをひどく懸念しているのだと思いますが、トルクメニスタンでは、イスラーム過激主義に対する過度の懸念が、服装の管理などに反映されていることはないのでしょうか。イスラーム復興の全般的な状況なども、おうかがいできればと思います。

日常生活であえて和装をする人たちの思いとは — 森報告について

森先生のご報告については、近代化の過程でいったん洋装にいったものが、ナショナルな意味を持たされて和装に戻ってくるという部分が、たいへん興味深いと思いました。中央アジアでも、女性解放運動の過程で洋装や断髪の実を盛んにしていました。「ヴェールを捨てて、ブラウスとスカートを着て、ボブカットに」というスタイルが理想にされた時期が1920年代、1930年代にありました。実際には、なかなか一足飛びに洋装には行けなかったのですけれど。

もう一つ、半ば趣味の話になりますが、実は今ではすっかりタンスの肥やしになっていますけれども、私は以前キモノが大好きで、『美しいキモノ』や『きものサロン』という重たい雑誌も捨てられなくて、今も家にたくさんあるくらいです。それはさておき、近年では、先ほどもお話に出ていました「きものde銀座」のようなかたちで、あらためてキモノを愛好する人が一部で増えていますね。「キモノで暮らしましょう」という人たちもいて、そういうなかに「キモノ男子」といった人たちもいますね。京都大学にもいて、キャンパスでときどき目にします。そういう人たちは、どのような思いで「日常生活をあえてキモノで」と思っているのか、もし何か調査等からご存じのことがあれば、お聞かせください。